

じ、あわせて洪武・永樂時代の中國史上の位置についても、従來とは異なる角度から考えてみたい。

靖難功臣の封爵について

川越泰博

壬午年——建文四年・洪武三五年（一四〇二）は、明代初期の歴史上最大の激動の年であった。三年前の七月四日に始まった靖難の役がようやく終息し、瓦解した建文政權に代わって永樂政權が誕生したのであった。建文政權に仕えた官僚の行動様式は様々で、あるものは永樂政權に投降し、あるものは臣従を拒否して殺され、あるものは逃亡した。このような状況の中で、永樂帝は、七月一日即位詔を發布して、新政の基本方針を打ち出した。そして、九月四日には、靖難功臣に對する封爵を發表し、あらたに公侯伯の三爵を選出したのである。このとき、封爵を賜與されたのは、合計三一人であったが、この發表は、世間をあつと言わせたに違いない。江湖において靖難功臣と目される人々の名と著しく齟齬していたのである。たとえば、通常靖難功臣第一とされる道衍（姚廣孝）の名がみえないだけではなく、逆に、靖難の役期に建文側の大將軍であった李景隆のような人物が封爵の対象になっているのであり、封爵者名を聞き知った人々は、一樣に違和感を抱いたであろう。洪武三五年九月四日發表の封爵は、なぜ世間の受け止め方と異なるものになったのであろうか。本發表においては、この封爵問題について検討を加

え、併せて當該時期の永樂政權の在り様を考察しつつ、右の理由を探りたいと思う。

梁啓超「新民說」の歴史的評價

狹間直樹

梁啓超といえば『新民叢報』、『新民叢報』といえば『新民說』である。「新民說」とは、周知のように、中華體制下の臣民が近代世界内の國民（新民）になることの必要性を多角的に説いた文章である。書かれたのは一九〇二年から〇六年にかけてのことで、梁の多くの重要文章と同様にこれも「未完成」品である。

二〇世紀初頭の中國の知識人は、毛澤東も胡適も、ほとんど全てがその影響を受けて青少年時代をすごしたのであった。當時における壓倒的な影響力はだれしも認めるところなにかかわらず、現今の歴史學界での「新民說」評價はそれに適わしいものになっているとはいえない。むしろ往々にして、急進的革命から漸進的改良への分水嶺的な位置づけさえ、爲されているくらいなのである。孫文との關係の變化、康有爲による叱責等、それを傍證する事柄が數多くあることも認められねばならないのだが。

しかし、そのように單線的な前進後退をおこなう「説」が、一時代を被りような影響力を發揮できるとはいささか考えにくい。人々の感情に訴え精神に染みこみ、時代の轉換に大きな役割を果たしたものは一體いかなるものであったのか。梁啓超の「新民說」のもつ

中國近代思想としての時代的な特色を、明治日本との関わりにおいて歴史的に検討してみたい。